Community & Friend

2024年7月号

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 7 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

いつのまにか 7 月号、さて、何から書こうか。

ともかく画像は LOU REED。

BERLIN というアルバムをよく聴いていた。何年に亘って聴いていたかと考える。40 年近くになるのではないか。もっとかも知れない。というのは今の iPhone の Apple Music にもダウンロードされていて、ひとりで長く運転する時は、時折聞きながら走っている。初めて聴いたのは 20 歳過ぎだったから、50 年という方が正しいかな。明確な影響を受けてはいないが、その分深いところで存在している。気難しい気質のように見えるが、実は頭のスッキリした人なのではないのかな。

見せかけの言葉の裏に真意が潜む作詞は、言葉の狭義を逃れることが出来、それだけひとつの概念に近づける。『背を早み　岩にせかるる　滝川の　わかれても末に　逢わむとぞ思ふ　』　さて、読めば百人中百人が意味を知ることが出来ると思う。もちろん高校の授業で出て来た一節だが、子供の頃近くを流れる芹川という、舟橋聖一が書いた『花の生涯』の出だしで夜鷹が登場する堤の、この川が遊び場だった。

川に浸かり、小鮎を追いかけるのに厭きて、佇んで川の流れに見入っていると、川面から出ている大きめの石に当たる流れが、ふたつに分かれ、過ぎれば互いに急激に吸い寄せられ、またひとつになる様子にとても惹きつけられた。この歌を見た時はその情景が直ぐに脳裏に浮かび、とてもよく理解できた。

そのように思うと、先の・・・見せかけの言葉の裏に真意が・・・は、ある程度その概念が経験値として入っている事が条件になる。またその経験値の幅と奥行きが、解釈を巡って議論を呼ぶ。そしてその思考を通して案外ひとは、文化を発展させ、高みへと昇らせて来たと思う。もちろん高みはひとによっても違うのだが、ひとつには真理と云うものがある。どのように考えてもこの世界にはルールがある。定めといってもいいかも知れない。むかしの定めはもっとシンプルだったように思う。ところが、どうにでも生きて行けそうになると、たちまちそれは複雑怪奇になってしまう。つまり何でもありの様相を呈する。

自分自身と、世間との距離感が分からなくなる時がある。そのように考えると、案外正しさの幅は想像以上に広いのかも知れない。だとするとその正しさは目的を持っていないのだろうか。仮に目的を持っているなら、到達する筋道は最短であるほど良いが、それが時間となると、急がばまわれの如くその時の条件によって、多少遠回りでも確実に目的に辿り着く道筋が正しい事になる。亡くす少し前の事だが、新聞に掲載されるクロスワードを毎週の楽しみにしていた父が、『分からない』と言うので、縦横のヒントを聞くと、すぐに『浮き草』だと分かり、そう応えた。すると、父は『よく分かったなあ』間を置き、『そうかお前そのものだもんな』と言った。その時の父は冷静で真顔だった。

長い間、浮き草稼業のように、人生に意味など無く、唯、時を過ごして生を終え、その間際に自分を肯定できればそれでOKだと考え生きていた。

確かに父のいう事は正しい。その父は色んなことを私自身の前で呟いてくれていた。久しぶりに思い出したのが『武士は喰わぬが高楊枝』『ふ～ん、武士も大変だな』だった。父はよく遊ぶが努力もしていた。このセリフはいつ頃聞いたのか覚えていない。相当むかしであることは間違いない。何歳だったかは覚えていないが、その場所の光景は何となく記憶している。そのまぶたの像からすると幼稚園に行く前の家になる。当時、井戸が現役で、その井戸は『水屋』と呼んでいたトタン葺きの、畳12枚程度の小さな造りにあった。4つ5つになると、記憶をもっと詳細に辿る事が出来るので、それ以前かも知れない。

『武士も・・』というのが味噌で、『気高さ』を守る大切さ以上に、その滑稽さが分かるようになったのは、もっと後の事だ。『孤立を恐れず、連帯を求めて』というセリフに出会ったのは16歳だった。行こうと思っていた高校の当確ライン上にいることが分かり、冬休みの2週間勉強に耽った。その休憩時間にテレビを見ると東大安田講堂に機動隊が入る様子が映っていた。逮捕間近の自らを勇気づけるために、屋上でたった5人の学生が、鳩が求愛するように頭を下げたり上げたりして、デモ行進をしていた場面が脳裏をよぎった。

シニカルという言葉は好きだ。だけど、どちらの悲哀も笑えない。笑えるほど愚かではない。Lou Reed の好きな歌はどちらか一曲に絞れない二曲がある。**Walk on the wild side** と **It's a perfect day**。ひとつは彼が彼女になり、春を売る時の誘いのセリフらしいが、そんな解釈は当てはまらない。もうひとつは少し素直で

Oh it's such a perfect day
I'm glad I spend it with you
Oh such a perfect day
You just keep me hanging on

You're going to reap just what you sow
You're going to reap just what you sow

てな、調子で『ほんとう？』というところが味付け。素直に受け取るか皮肉ととるか、それはあなたの状況次第で、どちらでも間違ってはいない。というのは、最後部分、繰り返しの行は4度ほど繰り返されて、これが言いたいことで、前半はその途上のタフさのオアシスのようなものってことになる。『自分の蒔いた種は自分で刈り取ることになる』という新約聖書に出て来る一節の引用だそうだ。つまり、努力をすればいつか実る日が来る、とも採れるし、その逆とも採れる。逆というのは仏教でいう因果応報ということ。

さて、丁度一年ほど前、秋風が吹くころにはドルは下がると予想していたが、それは早とちりだった。2025年が幕切れなのか、幕開けなのかの読み違いだった。どうも幕切れのような気がして来た。そうすると、今年の秋から来年の春にかけてというのがスケジュール的に正しい。どのタイミングでFRBが利下げをし、従って日銀が利上げを許されるかだが、ギリギリまでそれは無いだろうと思える。何がギリギリかだが、米国は明らかに疲弊している。ドル高で日本の緩和資金が1500兆円も流入すれば、それは金融経済にとってとてつもなく大きな出来事となる。でも、金融経済はあくまで実体経済のパラサイトに過ぎない。

製造業が貸出高金利にどこまで耐えられるかに依る。もし、米金利が下がれば日銀は3%程度にまで利上げを出来る。そうなれば、金融資産は米日逆流し、先の1500兆円も日本に還流する。還流するという事は、不労所得が増加するということ。これが消費意欲を刺激するとは思う。だけど企業にとって無借金経営なら良いが、設備中心の小売業さんなどは新店・リニューアルが辛くなる。言っとくが金融経済は経済全体の95%である。だから景気はバブル化のように上がることは間違いないが、あくまでそれは実態を伴わない、つまり何ら価値創造の無い、相場だけの経済だということを忘れてはいけない。

悩みは尽きなくて、頼まれもしないのに、ひとの分まで生きているのかもしれないが、それでいい。

有限会社アルファー　吉田清一郎